



30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1

50001 8A



文庫11
A 104
24

柳田泉文庫

48 10662



娘子下
等ハ行
十九

萬葉集卷第十六

有由縁雜歌

在文集の下井の字可比者也

二壯士訛娘子遂嫵適壯士入林中死時各陳心緒作歌

二首

訛ハ桃の送り
入ト今人よほ

○三男共婢一女娘子嘆息沉沒水底時

不勝哀傷各陳心作歌三首○竹取翁偶逢九箇神女贖
近狎之罪作歌一首并短歌 娘子等和歌九首○娘子
等竊交接壯士時欲令知親與其夫歌一首○壯士專使
節赴遠境娘子累年悲嘆姿容疲羸壯子還來流淚口號
歌一首 娘子聞夫君歌應聲和歌一首○女子竊接壯
子其親呵噴壯子悚惕時娘子贈與夫歌一首○葛城王
發陸奧時祇承緩急王意不悅采女捧觴詠歌一首○男
女衆集野遊時有鄙人夫婦容姿秀衆諸仍贊嘆美貌歌

歌一首夫婦の下其姓二字と假名○所幸娘子寵薄還賜寄物時娘子怨恨歌一首○時娘子時別夫後夫正身不來徒賜裏物娘子還酬歌一首娘子の一時一奉相手作賜キシ贈スル○戀夫君歌一首并短歌、時娘子戀夫君沈卧痾瘦喚其夫逝沒時口號歌一首右の意夫君哥のたまヒ別々舉ハシマヤアヤマレ○贈歌一首本文次モ答耳一モトモテハ後サ○娘子見棄夫君陥適他氏壯子不知陥適顯陥適之緣歌一首引もた江もとと別々舉ハシマハ○穗積親王宴飲日酒酣御歌一首○河村王宴居彈琴先誦歌二首○小鯛王宴居取琴先詠歌二首○兒部女王嗤歌一首○推野連長年歌一首長年ハ奇古ムト○長忌寸意吉麻呂歌八首○忌部首詠數種物歌一首○境部王詠數種物歌一首○作主未詳歌一首○獻新田部親王歌一首大都ト股四

○消奈行文大夫謗佞人歌一首六消奈ニ二字と假名○府宮設酒食誘右兵衛名開荷葉作歌登時應聲歌一首○無心所著歌二首○池田朝臣嗤大神朝臣奥守歌一首大神朝臣奥守報嗤歌一首○平群朝臣嗤歌一首穗積朝臣和歌一首○土師宿禰水通嗤唉巨勢朝臣豐人等黑色歌一首巨勢豊人聞之酬咲歌一首

○戯嗤僧歌一首巨勢の下朝法師報歌一首○忌部黑麻呂夢裡作歌一首巨勢の字と假名○河原寺和琴面無常歌二首又無常歌二首○大伴宿禰持嗤唉吉田連石麻呂瘦歌二首瘦ニ送○高宮王詠數種物歌二首○憇夫君歌一首臣の字と假名○又憇歌二首スの字○筑前國志賀白水郎歌十首○無名歌六首○豐前國白水郎歌一首○豐後國歌一首本文

國下白水
○能登國歌三首○越中國歌四首○乞食者詠
歌二首○怕物歌三首

社火一首
○禮節對火一首
藝里色火一首
醉時對火一首
大軒博對興安縣對
山酒館對
山酒館對
姑配會對赤兵禮對
○前奈川文大夫對對入對

有由緣并雜歌

昔者有娘子字曰櫻兒也于時有二壯士共訛此娘而捐生格競貪死相敵於是娘子歎歎曰從古來于今未聞未見一女之身往適二門矣方今壯士之意有難和平不如妾死相害永息爾乃尋入林中懸樹經死其兩壯士不敢哀慟泣淚連襟各陳心緒作歌二首

謡まちよ相呼誘也戲也あいと打挑の語あそび一歌かげ二字淺深せんぶん左久利さくりとといよきよきにほこは壯士不ふの不ふ敢堪かんの逞うなづきこをを作つくての字じををらら送おもて春去者挿頭爾將爲跡我念之櫻花者散去流香聞するきこらば、かやー、せく、わがやー、そこらのをあ、ぢてゆけるの一様ようの名なよよく、あふそのんのとといみまうるるとと教おす

妹之名爾。繫有櫻花開者，常哉將戀彌年之羽爾。

いしのをよかせらせららうあさう、つねふやこいん、やこーのたに
ま二所名すかじもひり秀川とよめ、きよみ花々くは無よのと、とのま

ハ生十九毎年得之等之乃波とす

或曰昔有三男同婢一女也。娘子嘆息曰：「一女之身易滅。
如露三雄之志難平如石。遂乃彷徨池上沈沒水底。於時
其壯士等不勝哀頽之至各陳所心作歌三首。娘子字曰
鷺兒也」

無耳之池羊蹄恨之。吾妹兒之未乍潛者水波將涸。

み、なやの、け、つうめ、やぎしこぶ、こうて、かつ、ば、みつ、あせなむ。
大和耳鼻山のをちうて、沈一の、助婢た川がれうとあれ、水のゆひれ
とあせとよふたし、うきておのをく、むよま。

足曳之山縵之兒今日往跡。吾爾告世婆還來麻之卒

あ、びきの、やま、かづくのこ、ほゆくと、よつけせば、のつちこまーを
ちく、鳥す、くそ、あせて、し、う、せよと、よもる、ひに、舊、れも、復、災とい
ちる、よかく、でけす、還、ハ、逃、の、は、そ、く、を、やく、こ、ま、く、を、ど、の、と、く、き、そ
き、と、う、例、べ、又、接、よ、は、と、と、こ、モ、付、捺、約、し、る、を、やく、き、く、還
東、す、と、と、よ、る、の、復、灾、す、と、考、よ、か、づ、と、前、べき、す、や、し、空、き、
紀、及、せ、集、す、か、づ、ふ、用、れ、、雙、し、通、す、う、と、い、す、

足曳之玉縵之兒如今日何隈宇見管來爾監

あ、びきの、やま、よづくのこ、く、の、こ、と、づくの、く、ま、と、み、つ、き、よ、く、
あ、ひま、の、袖、引、と、あ、つ、う、へ、む、ハ、ひ、の、そ、ま、と、よ、う、停、る、す、と、う、
あ、る、耳、め、く、い、づ、の、あ、う、を、の、袖、を、と、め、ぶ、ア、ス、じ、き、て、か、く、身、と、役、
す、と、う、る、二、と、じ、復、す、す、達、す、あ、く、い、れ、す、

昔有老翁號曰竹取翁也。此翁季春之月登丘遠望忽值

夷羨之九箇女子也。百嬌無儔。花容無止。于時娘子等呼老翁喰曰。歎父來乎。吹此燭火也。於是翁曰。唯。漸趨徐行。著接座上。良久娘子等皆共含嗟。相推讓之曰。阿誰呼此翁哉。爾乃竹取翁謝之曰。非慮之外。偶逢神仙迷惑之心。無敢所禁。近狎之罪。希贖以謫。即作歌一首并短歌。

無の下止ハ比の四の洪。此の下燭ハ鍋の湯。此三のハ翁と又ス解おう。アリ。とちうととよまきて。シテ。物語。竹取ヒリスの事ハ矣。

仲が主と。天竺の大宝廣博樓閣經の一の卷。佛言。方徃古昔不可思議。乃至有三仙人。乃至時彼仙人得法歡喜。心生踊躍。於其住處。便捨身命。所捨之身猶如生酥。消融入地。即於沒處而生三竹。金為莖葉。七宝為根。於枝梢上皆真珠。香氣芬馥。常有光明。所有見者。無不欣悅。其竹生長十月。則自剖裂。各於竹內生一童子。顏貌端麗。令人樂見。最

勝端嚴光色殊靡相好成就。晚三童子即於是時竹下結跏趺坐。即入正定。至第七日。於其中夜。皆成正覺。其身金色三十二相。八十種好。圓光嚴飾。既彼三竹。皆變成七宝樓閣。後漢書西南夷傳。夜郎者初有女子。浣於避水。有三節之大竹流足間。其中有號聲。割竹見之。得一男。毛。かノや。の子。生。す。て。ま。る。も。く。と。い。あ。あ。も。く。は。う。よ。ハ。モ。ト。も。く。と。い。う。て。は。名。ハ。出。り。ん。太。の。か。く。と。か。く。も。ち。く。ふ。う。と。も。作。モ。と。や。と。の。も。れ。き。

綠子之。若子蚊見庭。垂乳為母所懷。槎強。みどりこのごくごくみよ。たらちー。ち。小ひ。このえ。た。まき。か。平生蚊見庭結絰方衣。冰津裡丹縫服。頸著之童子蚊。ちよこみよ。ゆう。ぎみ。ひつよぬひき。う。あ。つき。の。已。ら。ひ。

見庭結幡之袂著衣

服我矣

丹因子等何四千

みふへゆづちたのそてつけごろもきつれとにすれらるるよし
庭三名之綿蚊黒為髮尾 信櫛持於是枚寸垂 取

ふへみなのわがぐろあらかみとまくわてこふかきこれど

束舉而裳 繼見 解亂

つわあけてもまさみときみど

見庭ハ身よへ垂乳爲の者ハ況の後も、だくちね、キミチモの多環
知斯能とスル所也、袴と漫るべし前ひれき、それもち二つともんえのやう
あくたららーと御一、またあよ改りいつす、ゆくつねひ、くれ、たをきが
様能の腰はれも、腰襷のモレサヘド、されハ史記の後、及半身も、廻小
兜於背上被せといふ、かさりて、腰のあはれ、腰ものと云ひゆい
あり、ひねつきう、抱きまくらよ、もきつむう、もくちのとじてまく

けゆゆひく、腰のうのひくアキ、又ちごのすくつだくのうるう
トニ度のうもとのう、きぬもくてだもき、アサムグモヒマク
といふ、そら反らが、ねくふうあひてすゆ、そのせちで、そく、反らが、故
より夫のぬくらぬと傳へてにまき、うけよ、ぬくらうけ
えすゆす、たまたまきりくとゆく、少くぞく、筋へとまき、
ト引て、よまとすりのれれどよく、腰ハ集中、ヌ系をど、お令
もくな用ひられ、くも腰もとすまきもとよ、あれづく、又様と
一本腰よび、腰ハ穿きよ衣長良ともいふ。あく、平生蚊目、塵、
匂火のあふハ、平ハ達形ちよれば、すす列べ、生とてハよむても
か、詰すの考へ、ゆうきぬハ本縫肩衣、又縫うてもよむて
車五ヨ布可為衣ともよす、と袖をキと肩をヒリよ、古そ日
ううべ、結絆ハ傳まく、いつふ、今田をみて、ちとのえあると

リハ神ハちうて、肩より下りて、巻きしるよたちの縫とがぬをも
く、そととあとゆく、筋道ひよほして、もととうちどく、けと
ひす、それをひつゆめとひよ、あくびとひつむとひよゆめと
あひづれま、室表ニ冰は裡丹ハ津ハ田の裏、田とはよやけ、あくべ
ひだらふとけべ、ま十二^{トシ}絶裏衣とモ、又たうの名づかれ、ひだらふとひつ
らとよべ、こう四^{シテ}字ハ元のすくちもべといす、考へし、うちまきのまく、
意ハ愛のまの頸を倒ほぐまくと、日利^{ヒツ}とぞりすみひく、絹布^{シヤンブ}、結幡^{クルマツ}、
幡^{ハタ}、機^{ハシマ}、頸^{ハシマ}とゆもとよハ機^{ハシマ}にて、鐵^{ハシマ}をもぐてりよ、神^{ハシマ}と夜^{ハシマ}
あの肩衣^{ハシマ}とむくよ、毛ハシマが一人と來れる事の多^{ハシマ}されば、神^{ハシマ}と夜^{ハシマ}
ときむくもとあくき^{ハシマ}をもく、翁のむう^{ハシマ}とい一サ、丹因^{ハシマ}とハ因^{ハシマ}
むし^{ハシマ}、ハ集^{ハシマ}中丹つま跡^{ハシマ}とおもふひもくに教^{ハシマ}とひくの

送^{ハシマ}子等四千庭、口手^{ハシマ}、身^{ハシマ}余知古良^{ハシマ}等^{ハシマ}よたづきりて、三、身^{ハシマ}十^{ハシマ}
陳^{ハシマ}余^{ハシマ}よきかで、もととよハ甲程^{ハシマ}のあと^{ハシマ}よすく、室^{ハシマ}も云^{ハシマ}ふれ、仰^{ハシマ}
合^{ハシマ}もと^{ハシマ}よく、もととハ丹因^{ハシマ}四千子等我見庭^{ハシマ}と^{ハシマ}つんと、見^{ハシマ}と^{ハシマ}
して、乱^{ハシマ}もと^{ハシマ}よく、そぬ^{ハシマ}よく、いなの^{ハシマ}と^{ハシマ}物^{ハシマ}、改^{ハシマ}黒^{ハシマ}為^{ハシマ}糞尾^{ハシマ}、
秀^{ハシマ}者^{ハシマ}もと^{ハシマ}よく、後^{ハシマ}後^{ハシマ}、みハ^{ハシマ}よ^{ハシマ}よ^{ハシマ}、伎^{ハシマ}の保^{ハシマ}く、かくうき^{ハシマ}くと
ちく^{ハシマ}く、信^{ハシマ}く、信^{ハシマ}く、身^{ハシマ}の^{ハシマ}と^{ハシマ}かくう、がむ^{ハシマ}と^{ハシマ}、う^{ハシマ}かくう^{ハシマ}と
ハ^{ハシマ}よ^{ハシマ}よ^{ハシマ}、よ^{ハシマ}つね^{ハシマ}く、愛^{ハシマ}と或^{ハシマ}わざ^{ハシマ}、或^{ハシマ}解^{ハシマ}き^{ハシマ}と^{ハシマ}くま^{ハシマ}
う^{ハシマ}、女^{ハシマ}き^{ハシマ}の^{ハシマ}を^{ハシマ}く

童兒^{ハシマ}、丹成見羅^{ハシマ}、丹津蚊經色丹^{ハシマ}、名著来^{ハシマ}、紫之^{ハシマ}、

う^{ハシマ}あ^{ハシマ}の^{ハシマ}に^{ハシマ}な^{ハシマ}す^{ハシマ}、こ^{ハシマ}つ^{ハシマ}よ^{ハシマ}う^{ハシマ}な^{ハシマ}て^{ハシマ}、き^{ハシマ}じ^{ハシマ}き^{ハシマ}の^{ハシマ}
大綾^{ハシマ}之^{ハシマ}衣^{ハシマ}、墨江^{ハシマ}之^{ハシマ}、遠里^{ハシマ}小野^{ハシマ}之^{ハシマ}、真榛持^{ハシマ}丹穗^{ハシマ}之^{ハシマ}為^{ハシマ}衣^{ハシマ}
お^{ハシマ}あ^{ハシマ}の^{ハシマ}ご^{ハシマ}う^{ハシマ}み^{ハシマ}の^{ハシマ}もの^{ハシマ}、と^{ハシマ}う^{ハシマ}と^{ハシマ}の^{ハシマ}、ま^{ハシマ}う^{ハシマ}か^{ハシマ}て^{ハシマ}に^{ハシマ}か^{ハシマ}み^{ハシマ}

丹. 狐錦. 紹丹縫著.

刺部重部. 波累服.

打

小. こまくさ. きじもぬひつけ. さ. べかせね. みかせ. ねきてうち
十八. 为. 麻續兒等. 蟻衣之. 寶之子等. 蚁. 打拂者. 經而織布.
そち. とみのこら. もかまぬ. たうらのこら. のうつたへ. ておるぬの.
日暴之. 朝手作尾.

信巾裳成者. 之寸丹取為支屋所

ひぎくの. あさてづくわを. きかもなす. ときよし. さ. やど

經. 稲寸丁女蚊.

妻問迹.

我丹所來為.

彼方之.

二綾裏沓. 飛鳥.

飛鳥壯蚊.

霧禁.

縫為黒沓.

す. あやまぐ. と. まとふ. と. これよそきく. と. ちくの.
刺佩而. 庭立住退. 莫立.

禁尾迹女蚊. 紛鬢聞而.

我丹所來為水縲.

絹帶尾. 引帶成.

韓帶丹

され. とき. みを. あ. の. た. べ. の. お. び. と. い. き. お. び. す.
取為.

こ. ら. く.

うちあるの. 丹. ち. そ. ひ. 丹. よ. る. あ. す. く. ほ. う. い. つ. せ. は. し. 本. 見. お. ほ. れ. そ. 丹.
つ. う. ひ. 丹. そ. と. 近. い. す. な. つ. て. き. ひ. 刺. 亂. ま. く. 一. き. そ. う. 一. し. そ. う. 一.
勢. つ. と. そ. す. す. う. あ. ひ. と. い. き. ま. く. き. ま. ち. そ. う. い. そ. う. い. そ. う. い.
羅. 丹. 津. 放. 經. 色. 名. 著. 来. す. て. う. あ. あ. す. な. す. み. さ. ま. つ. す. い. う. あ. す. き. と.
訓. べ. し. そ. せ. す. 罗. を. さ. う. ふ. 用. さ. ま. つ. す. は. や. む. 詞. ま. く. 色. と. い. く. と. あ.
い. す. 物. 参. べ. 一. 番. の. 大. あ. や. ハ. 大. 蚊. の. 侍. と. う. べ. 一. 番. の. 遠. 里. 小. 脳. の. 構.
津. く. 真. 棘. は. 既. す. よ. 、 か. り. く. き. み. が. ほ. い. す. る. 衣. え. 、 そ. せ. す. み. の. い. の. き.
署. と. せ. の. ま. す. そ. う. す. て. し. い. う. 衣. の. と. よ. そ. う. こ. ま. す. き. み. と. よ. う. 衣.

但よハ絲をセテモ多くシメ、ひれにびだれしてのとこ、ヤベがきねべのべ、めこ
めハみす用、もて、さーかきぬこもく、さーとハ留といし、がきぬと、衣をり、ま
かきぬハ並まえ、又波ハ最の字と運びますて、こすがきぬ、うちそハうつ
き庭のとみく、夏麻若、一ハ助輝のミ、喜海、おやへ考のハ為ニ字ハ
鳥の一宇の語ふくうちを、麻とつゝ枕詞、をみのこうハ、女ハ昔
儀と業とそるがよ、女みると少々小いす、機衣、冠輝考、よ高ト、被
乞へ、宝のうらハ女とほえづく、毛よ上十で五匁ハ、うの女童の籠り人
ちうほくをひて、やうす様きをひのよつてぐるなうぐ、うつとハ美
細布、重ておる布と、もごて纖物ハ、足多とて、様物、のけて纖物ハ
ちのひす、日累ハ、足山よ便く反よさうす、久老ハ、日暮一のとトへる
乞へ、毛がべ、古訓へちむのをひよまーとあるハ、とる、うら、あさ
よづくす、毛ナタま川よまうは、もづくしよす、射ハ傳玉て麻、こきく

ますと、敷織とも考ハとす、の村輝考、ヨリ、まきとくすまきとハ、ま考
とうく、ヨキ、こまくすと、取ハ、ほり、酒、織の敷古とハ、东國みく儀化で
貢せ、一、賊役今、よくゆ、こハ、織の代々麻手作とろそ、入麻、
もぶ、儀様ある、やうす、半ニ、シキ、ノ、若者、お、常念而とよも、ハ、青織
をおもへて、きぬのたねをとひて、先れば、こいもきをとひが、道の様
を押すつて、ういとす、ういとす、行うと、まく、まく、人も見えず、高
よ隠れて、生とす、いなきと、之成勢紀五年縣邑よ稻置と置、ヨリ、
よか、おねす、稻置あり、さうかざねのサガの女のそれと、すーと、すーと、
出さよによみく、此の聲を男の言とひつて、あやと、なめく、丁、には
のとと、アド、さう、スー、スハサの字のほるん、妻同、つまゑ、
妻と、されど、ま、夫と、あハ所來ハ、皆うんとれていくると、何くといふま
室共、うんとて、我よび、まくと、仰くと、下、下のきて、我丹所來考と

ミハシテトモハ訓ヘテシナバ、まきとよもんをまされ、彼方のハ此後ハ
遠くよままう一ソシキツ、けもわばつ、ふー、若彼ハ仰の字と異、
方形ヨリ、浮形トソナレ、さて次の二後ハニ色の後のみ、纖部令子
浮物と上色後と並び革とよもハ接あしも、裏革、裏ハヒタミ訓キ
也、毛多の枕羽、あそえ胃、ちる多の墨よ皆よ化シ人ヨリ、又モ
キハ底より少しある事無キナリ、あこづらいシメウ黒背、くろぐつとも
くらぐつとも訓ヘ、衣服令鳥沓とよも、黒革の帯也、革當ハ日より能附ス
がよきちも、一と翁の役、室共云、まくわいにしやえす、おもての時
ハかの毛、ぎ葉をさむかよ、其のゆよ筋と骨とぬりとしや、佐ナムニカナ
おごとくナシトシテ、立位退の退ハ誤字あくへ、考ヘ、キラシトシ
ハ被をものもものとちかく人みな刀ももと、さしよく、ほのかくハモ
いざめうけとしめも、男の、じる、一きとほのうみすはくてホーとすくも、

太の橋きとよめよハあくで他のとよく、小をよざハ今小色トよも甲、
先よすモほのまくとよーとよも、うきまとよ、引革ハ和名抄衿帶、陸
詞曰衿、和名比岐於此小帶也、とく、是く、をすハぬく、かく、常ハ和名抄解帶、唐
設え、僻今接加良久美、纖絲為帶也とく、このうくみう

海神之殿 盖丹 飛翔 為輕如來 腰細丹
やうみのとの、いらうて、とじかく、も、うのどとき、こゝほそて小、
取飭水 真十鏡 取雙懸而 已蚊旱 還冰見乍
こすかく、じまうが、み、いすあ、かけて、おの、が、か、く、かつらひみつ、
春避而 野邊尾回者、面白見、我矣思經蛟、狹野津鳥、
はるやかて、ぬ、をめぐれ、おりろく、これと、おもへ、あ、めつどア、
来鳴翔經 秋避而 山邊尾往者、名津蛟為迹、我矣
きふきかけらふ、あきやまと、やま、と、い、け、ば、なつ、うと、これと

思經蚊天雲裳行田葉引

おき（う）あまぐわゆすたなびきぬ

やつこの歎の蓋よも、古訓アラシにかくとあれど、歎のすふよちよそ、翁カミいらのとよもれつ、聖心セイシンにあれ、神御の歎よ（る）は、何のよ（り）かうんじば、も
うるゝ蝶翼也、んと輝ハヤシの腰細きと、そくらへてて御きかよりえ、猿カニを
小まゝは、すほのきてあるをとめがさまど、す、さうそ猿カニハ改よ（り）かく、
せ（れ）月の後アフタの日とゆう、もとみと紹拂カサフて、す、取あめうけて、後
とり（一）と無ナシと、な、め、ほハ、而アリと、小あらざ、翁のよ（も）、す、神代
紀一書シキイシブ、あめのう（一）づものかひと、りよ、天垢地垢アツクヂクとちると、與ヨウい合ハマうべ、
果ハシマの言と偕ハシマて、う（レ）用ヨウを仰アゲまし、今果ハシマよ仰アゲハ語ハグ、還ハシマの下一本等の言、
かづこひと、ハ、う（レ）と延アシマ、そ、もと大のをとめが心ハスルてよきういて、えよと
さうすらさうすら久老クノロ、還ハシマ氷見ヒメ乍ハの下よ、吾丹ワタニ所來ハタケ為スルの一匁ハシマと落ハシマせり。

といふ、此考アガシきりみて至アリ、喜まひてハまよ生アリて、えりうる男の遊び
あるくとも、せきととくれば、面白くアリて、神のやまく、奉アリて於毛思アリ
伎壁アリと、まやまこととくよめ、我とせりうる日アリて、もとあ下アリて、羨アリがま
の題アリとくとくとくよ、さぬとくのとくハ後アリ、せつまく、雅アリ、古事記ハ毛思アリ
内アリのよ作奴都ワヌツト等理岐藝斯波リヤギシバ等アリ、半ハ、健祐紀ハシマよ奴都ワヌツト等利アリ、一ハとも、
半十三アリよあり、かげらしハからうと延アシマ、林アリて、林アリ多く、天アリも
も、そこそくとひりを、うそくうりぬととよす、これハ情ハシマき報アリ、幼アリと
サアリ、そももよまゆま、てまゆまアリて、まゆまアリて

還立アリ、路尾所來者アリ打水刺アリ、宮尾見名アリ、刺竹アリ之舍人アリ
かアリたち、みちとくれ、ばうちひよ、みやを、とあさすだけのとねり
壯裳アリ忍經等水アリ還水見乍アリ、誰子其迹哉アリ所思而アリ在アリ
をとこアリ、之ぬがらひがらひみアリ、たゞござとや、おしやもて、あらぐを

如是所為故為古部狹狹寸為我哉端寸八為今日八方
がくで土てあるいふ一のさきわればまきやけよやも
子等丹五十狹通途哉所思而在如是所為故為古部之
こうふいやよとやおもんえあらんをがくで土てあるいみの
賢人藻後之世之堅監將為迹老人矣送為車
かこきいどりのちのよのがみよせとおひどとおくとくるま
持還來

かてかづく

還ならせよゆりておの大道と行方とよ路とそれどもはよま大の
まがーあくんわいじとればとよべー、みやとみよハ宮女、よき行の
ハ侍ハ多モトモ多モトこれどもいよす宮ハあれハ黒きて、なちよ
舍人といつ、とねうとこのとねうの酒ハ人の男うみて見ゆ

の人とよ、さうびらひ、さうびとよとよぬびらひと、又延てさうびらひと
はうく二重よ延ちと例も、さうび幕、たゞさぞとや、それくとよ
がくでとよも、かくのくわくわく破き人と牛とと、又四訓のよーかく
よーくよーく、此若まうーとよーすや、さくさくこれや、古くあくわくう
アラマーレれや、室もささきへ壯年のは、さくつアモテメキニカタ
ヨモキナウイアラベー、ちきやーよなき出、いふやくくふ、いきや
モモリとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
不都ソミ、我輩の轍とし、いしゆうそく、かく砲く者ーをくく人、然
べてりそとく思やえてあらんと、がくうてちくと、がく砲ううへと云
すと黒々、二度ひいて上のうを信ひず、もし又さきうて並あまう
一とひう、古への、もよ下老とをすと、堅監の堅ハ奴の謀
きだりとけんとあられき、室も規監さういためり判さがん、元の

まもてがくみすゆー、又ニ二字ハ鑒の傍うく、みもとあんり
とのす、老人ともく車をうそとひく、との堅監よせんとしよ
と佐ア、二ルハ孝子傳云、原穀者、不知何許人、祖年老、父母厭患之意欲
無定、穀年十五、涕泣苦諫、父母不從、乃作輿昇棄之穀乃隨取輿歸、父
謂曰、爾焉用此凶具、穀曰、乃後父老、更不能作得作得ハト、是以后之耳、父
感悟愧懼、乃載祖歸侍養、更成純孝、りづちもみく、かれ、ハモリト
てなほひむらしき、持一車やうと引きましと、やうとさとら
はまうらぐくいはまく、あやまき御主、ねぐらをまく

反歌二首

死者木苑相不見在目、生而在者白髮子等丹、不生在目ハ
方志あひこそ、あひすあらめ、すうあらぶ、おらかこらに、おしさらめや

木水とくハ誤、古キテ居テ改、おもくあふ、おもむくとくと
白髮為子等母生名者、如是、將若異子等丹、所言金目ハ
おらうてこらし、いかがくのぞくわのりんこらに、のらう、むねめや
おらじ生くあり、かくとも四うゆく、又おきくよるうのちゆーはあく
ごとく、將若異のちまよとくとく黒ハかきると、第訓は交アモウク、つ
く、おもむく

娘子等和歌九首

端寸八為老夫之歌丹、大欲寸、九兒等哉、蚊聞毛而将居
ちきや、おもむのて、おほーき、このくらや、かまげてとこん
鶴ハ老人とあむふおりーき、隼牛背犯もく、くもくとハ女の仰す
もむくあむと、がまげ、宣極紀惑とがまげと、孝経化よ誠とまくよ
がハ度深き、廻のとく

辱尾忍辱尾默無事物不言先丹我者將依

はぢや玉ぬびおちとわだてこととちかのいだめきよ。これ、よみすん
あらんくらみのまみせぐのまくくらみよまうまくう、おりまく

たるふよくく

否藻諾藻隨欲可救貌所見哉我藻將依

ひまうういほうもまよゆすき。からみゆつし。それとうわなむ
いまうういハ否藻のまのめーい信の身よきのいとまくうとじよ
くがのまくうとまくうとまくうとまくうとまくうとまくうとまくう
きくをとくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

きくをとくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

死藻生藻同心跡結而為友ハ違我藻將依

まにいきおちくとむちじて。ともやたざりし。これによまく

ハハ不のほくく。とねたがふとまくとまく。一とハナとれし。申。とくとま

マ友よハたうへ

何為迹違將居否藻諾藻友之波波我裳將依

なふせんとたういをまく。あらうもくのまく。これもよつたし

室もく。迹ハ途のほく。あふせんとまくとまく。いふとてあよたうし居し。

波くとまく

豈藻不在自身之柄人字之事藻不盡我藻將依

あふもあらうちおのづのうらじとのこの。でくとつくせ。とれりよすやく

あらハ何ふ申。あさあくば。何の海。あくをとまく。おのづのうら。ふく

のうらみて。故のうら。きのあまく。友の何とあく。とくとく

あしたふよくとまく

者田為為才穗庭莫出思而有情者所知我藻將依

をすきほよいでと。おじる。そろ、ちれつ。それもよつとん

初物ハ極りつとん極也。とよへでと。もみくらはんよとくれつ。

墨之江之岸野之榛丹。丹穗所經迹。丹穗葉寐我ハ。丹穗水而將居

モミのえのきーぬのオヤヒ。ふちあれ。ふほハぬれや。ふほひてをらん
春之野乃下草靡。我藻依。丹穗水因將友之隨意
うちのぬの生てこや。あびき。とば。ふうじよつなん。とくのあふく
まナマハナタタキ。ハラロウ。きがく。も。あんく。まハようか。とくある
めく。まのぐく。うれ。体。ふみ。い。うづ。うづ。ま。ま。とく

昔者有壯士與美女也。姓名不詳不告二親。竊為交接。於時娘子之意欲親念知。因作歌詠送與其父。歌曰。父官本夫。母を用ひ

隱耳。戀者辛苦。山葉後出来月之顯者如何
こやとのこうすれ。ごく。一。やまと。ゆ。ひで。くる。つきの。あらと。さを。い。に
山の場。ち月の。お。あく。きあ。つ。ま。父。母。さ。ん。や。う。せ。ん。と。男。小
よ。そ。

右或曰。男有答歌者。未得探求也

昔者有壯士。新成婚禮也。未經幾時。忽為驛使。被遣遠境。公事有限。會期無日。於是娘子。感慟悽愴。沈卧疾瘵。累年之後。壯士還來。覆命既了。乃詣相視。而娘子之姿容。疲羸甚異。言語哽咽。于時壯士哀嘆流淚。裁歌口號。其歌一首

如是耳爾。有家流物乎。猪名川之。奥乎深目而。吾念有来
かくのこに。あざらるひのと。あまがまの。おさこと。ふうめて。わづもつかひる
松前橋は。さきとすすて。まくもりする。モニほのほそと。とくとく。
源氏ノソノ御水を。まくと。まくと。モリケテ。女のうぢうまを。結つきて。立ちて。生
きあると。ヨリまとかひて。いりが。ササシモト。ソラ。あよ川を。よもやう。はの
園ヨウイク。人。なまく。

娘子卧聞夫君之歌。從枕舉頭應聲和歌一首

烏玉之。黑髮所沾而。沫雪之。零也。來座。幾許戀者
ぬ。またまの。くろか。ぬれ。あ。ゆきの。ふるふやきます。く。たこふれぞ
くろい。男の。爰どり。たの。行。ほんの。ちよ。く。いれど。や。はううす。く。たま
き。り。女の方。よ。う。く。く。立。れ。に

今案此歌。其夫被使既經累載。而當還時。雪落之冬也。因

斯娘子作此沫雪之句歟

車之有者。小泊瀨山乃石城爾母。憇者共爾。莫思吾背
こと。一あら。とは。はつせや。まの。い。そ。き。ふ。り。こ。か。ら。ハ。と。り。に。な。お。む。ひ。わ。が。セ
ヨ。あ。う。な。た。と。ひ。父。母。の。せ。め。て。い。う。ち。ま。す。出。ま。す。う。ち。も。と。よ。し。る。壁。ハ
お。ま。き。と。い。ち。ほ。う。ぶ。と。か。と。ハ。お。く。た。る。莫。う。れ。く。と。り。そ。さ。く。て。の。ち。の
ト。か。く。ま。で。お。う。で。を。を。し。り。そ。と。里。く。

右傳云。時有女子。不知父母。竊接壯士也。壯士悚惕其親
呵責。稍有猶豫之意。因此娘子。裁作斯謌。贈與其夫也。
安積香山影副所見。山井之淺心。平五口念莫國。

あ。や。う。や。ま。か。け。や。み。ゆ。る。や。ま。の。あ。や。き。こ。る。と。わ。づ。む。ひ。あ。く。ふ
安積ハ陸奥郡タ。寺十三天寺の新しくゆること。うくの。あ。せ。の。門。ユ
ト。あ。る。や。く。も。ゆ。き。と。り。山。の。井。ハ。あ。づ。う。酒。多。め。く。よ。の。お

の極まる事より、かくは、嘗てある事無く、傳としし所の事とせり。

右歌傳云葛城王遣于陸奥國之時國司祇承緩急異甚。於時王意不悅怒色顯面雖設飲饌不肯宴樂於是前衆女風流娘子左手捧觴右手持水擊之王膝而詠其歌。

爾乃王意解脫樂飲終日

詠の下其官乎此化妻申云高槻もいづれあらあし伊与凡士記云陽郡天皇等於陽幸行降座五度也以上官聖德皇子為一度及侍高麗惠王葛城王等也天武紀云ハ年秋七月己卯朔尚未四位葛城王卒次より大臣橋朝臣諸兄弟と葛城王と名づく此三人のサハ天武紀より名づく葛城王もるきうちをかハ夙ち祀ハ文櫛タハ位トシテ精勤リハ勤精トシテ知音ヘトヌケレバ歎仰の如クシトカニ傳キトシテノミモナヒトモ精勤トシテ詠繫ヒト哉セキハよ大佐橘家寔ヒト載スナホト大臣いま葛

城王ちうりく四そく、大臣のまこと役を、一とひて、翁も聖武孝謹の方ハ大や法多々、此うそ時代のうそされば、高槻ももくじて、是ハ天武紀八年四位主と高槻ももく、又東女ハ後紀文武大宝二年四月壬子令命詔坐七国及趙後國簡監采女兵衛貢之但陸奥國勿貢ヒアシテ、この時すよりたゞつにあら采女ちるるすゝる、がく、がく、がくすすあゝす、持水こゝハ此うと涌出ノリ、少と抜て出でる。墨江之小集樂爾出而寤爾毛已妻尚守鏡登見津藻ちみのえのをづめひで、うつ、ふもおのづますらをかみくしつし住吉の社と、七十餘度の休すゑく、毛時人多く集まつたまき、古トテ御のうそと、小集樂の三室中復半袖中板敷衣萬葉もとを、うと御、或人、住吉梅園日向役、住吉民方の風俗、毎年二月廿日あさ二日をもと、慶賀と連ね、酒至と設宴飲合乐遊試踏

躍、ひのりあと從うて、先あは水火を致り、神保と太神と秋津がる語
を度辞とどもす。かむちとよおと名づけとて度海しよ、或い噴神
海、又ハ時祭海もいう。小豆川は祭の事といふ。又集の字一点へらひ
御戸舎の義ある。おどろく金集もるさうさればとらへらひの
略ちちよぐ一、直金とまほらひと御軒、四門とづりとくと、てらハあつまう
の約もとをまくともとゆれば、省く四門よりれど、已あとのま
とよもハキアガキアガキアガキアガキアガキアガキアガキア
キと、おもとむすびのめく、あはむむうとまく、おもとむすびのめく
ふキドキカク、あはむすうのめくとまく、おもとむすびのめく
お、あはむすうきよとく一、廣ハやみの傳すとく、と阿のすとおとく
ういて、行參べ一

右傳云昔者鄙人姓名未詳也于時郷里男女衆集野道是會衆

之中有鄙人夫婦。其婦容姿端正。秀於衆諸乃彼鄙人之
意彌增愛妻之情。而作斯歌讚嘆美貌也。苦考の下有の字
と取せる。姓名との五字レキ行セラハ是

商寢領為跡之御法。有者許曾。吾下衣寢賜采

あさかわう。士うすとののみ。あはこそ、わがちうごうも。かへたまはめ
夷仲ミ。あさかうハ段ニ也。あはいとおう一。ほよ。多よ。度一。て、或ハあと
もと。今頃よとよき。おれべ。あさもひて。度。じうすと。自由。ちうす
むも。と。い。と。よ。夷。度。お。じ。く。め。せ。ー。御。べ。ー。お。ね。す。ち。く。と。う。の
や。六。さ。る。は。は。も。あ。き。よ。お。れ。と。お。ね。す。あ。ん。や。と。お。る。べ。と。い。れ。き。う。の
き。ひ。ま。く。と。ー。め。せ。こ。の。御。い。ふ。あ。ん。室。ま。う。あ。き。う。う。お。れ。と。う。の。う

前へよりて、道別をきる之ハ云の後もさんとつりき

右傳云時有所幸娘子也。姓名寵薄之後還賜寄物。俗云
美於是娘子怨恨聊作斯歌獻上

味飯宇水爾釀成吾待之代者曾無直爾之不有者

うまひとみづよかにわざまちかうひをなすたゞふーあらねば
うまひは熟せる飯どり、待はたすむかうひをなすたゞふー
やもゆやすひすやのまん友あすてといふくまと待て候事あ
確もるく代考をも先へたまきうひをすうぬう梅花不開之代爾
みてよろそきりはまけとさればごはまきと門へとお
それま按小かひはうてなーとおうかがいばかりのゆすうまきれば
右傳云昔有娘子也。相別其夫望憇經年爾時夫君更娶
他妻正身不來徒贈裹物因此娘子作此恨歌還酬之也

憇夫君歌一首并短歌

左耳通良布君之三言等玉梓乃使毛不来者憶病吾身
さにづらすキヌハシトシトシたまづさのづうひしきんハおわしやむわのミ
一曾千磐破神爾毛 莫負 卜部座 龜毛莫燒曾
ひよつぞちちやふるかみすおほせうりきもかめもやまき
憇之久爾痛吾身曾 伊知白苦身爾染 保里村肝乃
こひくふりきやうみぞいぢどふくみよとほりむらきもの
心碎而 将死命 爾波可爾成奴今更 吾可吾乎
こころくぶけてえなぐのち小ちうにあすぬいまさらにはくみうわを
喚足千根乃母之御事歟百不足 ハト乃衢爾ノ占爾毛
すよたらちねのちのみとつかりならむやうのちまくよゆよけふ
ト爾毛曾問應死吾之故

うつむそぞよみぬづきわうゆゑ

まつよ改め夷うもと、泣きうてのま、怪病うが病ら、まひ。
あらば神のすまをわざもあくびとふこま十、ヨギトアヌ神う
あぶきとく神よほせんかうげて、ひでねほふ人トのをわざまよ、
あらききくうづけの神よをひりやくとひて背ド、くべもをひく
甲、まくまくくよのーとハ酒、モセ玉拾え久といふえと回、塗のト
等のうき放一ちきびー、染のホト等の喰うとましして放、と、又エテ、
のうとほーし、がひの峰へ、わとははまくしまる時、れよみて、と、身の
みと、あがむる酒とく、飲、飲、飲、下のまーうるこいはまや取め、ま
ちまのと、えふもうはまくとす、身の邊にあら、あるハ魚のトーテの
船とよ

反歌

ト部宇毛、八十乃衢毛、占雖問君宇相見多時不知毛
うら、をいやそのちま、うら、うら、うら、うら、うら、うら、
うら、ハ奈ト、やまのちま、うら、はよ、ト、あうやーが、うら、うら、
うら、うら、あ、まども、うら、うら、うら、うら、うら、うら、

或本反歌曰

五口命者惜雲不有嚴追良布君爾依而曾長欲爲

わう、のち、を、あ、よ、ふ、よ、き、よ、あ、て、て、あ、び、く、ほ、り、せ、ー

右傳云時有娘子姓車持氏也其夫久逕年序不作往來于時娘子係憲傷心沈卧痾瘵瘦羸日異忽臨泉路於是遣使喚其夫君來而乃歔欷流涕口號斯歌登時逝沒也

贈歌一首

真珠者緒絶爲爾伎登聞之故爾其緒復貫吾玉爾將爲

おらまへとたえー小キときーゆゑよのとまくわきわたまふせん
誓おみ日か紀れ記、真珠太麻裏、てるもがもよまきふるをりせん
モ候ハシテヨウキよせん、うのとハナはよアム

答歌一首

白玉之緒絶者信、雖然其緒又貴人持去家有

きらまのとたえふまこときうわじよのとまくわき、ひとりて、ふけ

有ハ里のまの候

右傳云時有娘子夫君見棄改適他氏也于時或有壯士不知改適此歌贈遣請誄於女之父母者於是父母之意壯士未聞委曲之旨乃依彼歌報送以顯改適之緣也

穂積親王御歌一首

家爾有之櫃爾鑠刺藏而師戀乃奴之束見懸而

いよあもし、いよかぎり、ときみて、このやつこのづみかみて
和琴抄櫻^{和名}比部、鎌賀岐^{トモ}、四川^{さう}とも、妻^めよ^よと^よの言
よ^よゆといふ、俗^なと^ざうと^はあむれど、左^ひ、と^あ、も^すり^そと^て翁
がまくあむつ物^{もの}すま^せむ^しの^の、^ノ面^お久松作^くと^くと^くと^くと^く
とりて、こく^くよ^む一、半^二まちくを^くと^くと^くと^くと^くと^くと^くと^くと^く
ぬ^く御^ごお^と、ま^でお^と、あ^くと^くと^くと^くと^くと^くと^くと^くと^くと^く
み^くれる、を^うと^く今^きと^く知^く、

右歌一首穂積親王宴飲之日酒酣之時好誦斯歌以為
恒賞也

可流羽須波田盧乃毛等爾吾兄子者二布夫爾笑而立麻
為所見^{田盧者多}
^{夫世反}からうす、たふせの力、小わせこ、ふす、よもうて、たちませうみゆ

和名抄 碓賀良

字湧

うもよ因ド、生トハセキ、又のゆめとゆの衣の花束シスル布マ尔惠矣
天ミ、田舎モト妻のもろセキトスムのニ傳シテ及の字前ミ
がくゆうてちうほみ、又女也モ化レモ

朝霞香火屋之下乃鳴川津之努比管有常將告兒毛欲得
あやがすもかびやうしたまくかび、止めじつありとつけむことらも
御衣持羽、かびで、走十走十二す。乃ハ耳、尔の邊くとをかはに、
せり、万ハ達れるアリ。上ハ最敷地といと序多く、足安をもとめて、いりて土
のじて左と、もあよ若くよもうとよこちもく。

右歌二首河村王宴居之時彈琴而即先誦此歌以為常
行也

續記 宝龜八年十月無位川村王は五位下を授ヒズネトヨシ

延慶九年九月ノ日

暮立之雨打零者春日野之草花之未乃白露於母保遊
ゆづちのあめうちらばかちのぬのと、あみのうれ。ちうつゆおじほゆ
半十ゆづらの面露毎すむる中の尾花うとの白露身ゆよて報
ア、草花と枝ぢる。御半八書半八。

夕附日指哉河邊爾構屋之形乎宣美諾所因來

ゆづくひせ、ちやかべよつくるやのがきをよろこみ、よろこひけり
古一夕新カテ、吉後モの美麗モトツタリテ、キハ吉はの聲
有き、よきもつまより、人の勢ひよきもひて、先も容頗のよき、
有き、よきよせ、とよきよき、よきよきとよきよきとよきよき
ふいて、室もち、結白うへどよきよきとよきよきとよきよきとよきよき

右歌二首小鯉王宴居之日取琴登時必先吟詠此歌也

喧シハ
三得

其小鯛王者更名置始多久美斯人也

此主不入

兒部女王嘵歌一首

嘵字錢玉嘵蚩同充之子之二反戲也阿佐介

又曾志苗又和良不一切經音義蚩或嘵戲笑也

久主嘵

詰

美麗物何所不飽矣坂門等之角乃布久禮爾四具比相爾
計六

うま一ものべくあうめどせうとうらがづぬのふくは土ぐじあひよく
葵沖波角のそれとへふれ、殿のあくまく又牛の角麻の角ふど波十の
うれれば、やうのやうに教つまく、もと里りすいつまく、ふとさく
ちいきうそとあがくりやうつまや、西氏おけまつむ花よ下がち
ちくわりやうといすとモ、朝の波、オウカカラ子かと今よつてつる、
暮ふくは歎のをのうれいとまど、破留よ壁よつて、土ぐじのあらまの船

ういとれき、殿ハ和名舟北角反和名布久流肉憤起也、宇後輔古頭父、不久苗と、室
主、左多記美斗能麻具波比の麻ハうまくといふより多一、後龍紀う
まくゆきと于魔伊御と云、具波比ハ麻より連か。奥と湯
れど、右へはと湯る傍よりれ、左ハ久波比もて久比阿比の傍りと云
んね二つが一つの会と久比阿比ともばらざいあひよくと云もへと世傳
よねと仰り合ひとまとまくハすとりす、即三くしあひよの仰りとるもへと
よねのぐくのよきあきとりす、もとあひのよきあきとりす、凶波加ち
べ、もうのよきあもくハめぐくも、ようくもととものとてあくよきと、坂
とハアくとき里ととすとあきよく

右時有娘子姓尺度氏也。此娘子不聽高姓美人之所誣。應許下姓醜士之所誣也。於是兒部女王裁作此歌嘵嘵
彼愚也。詫桃の邊へ覗くが奴は怪嗟と嘵と嘵と語れど

古歌曰

橋寺之長屋爾。吾率宿之。童女波奈理波。髮上都良武可
たち。あてらのあこやふわうゐね。うゑゐはあひかみあげつうんの
橋寺へ大和鹿毛の毛。重徳をよ達ひす。善徳もとよ。毛鹿ハレ。株毛く
迷れむ鹿といふ。たゞそきつをりん。おねーへいきぬ宿るされべくちう。
うゑゐハ和名抄髻髮宇奈うい。髮とのゆは至二三万沙ほのうけハ
めれとうとうふあくらて。半古たちぞまの古婆万波。里我ヒカム人
ミタクシ。あれハいつとリマタヒアリ。せうとうナヌモと。たほん
をひぬ人のちうゆ。

右歌推野連長年脉曰。夫寺家之屋者。不有俗人。寢處亦
備若冠女曰放髮卯矣。然則腰句已云放髮卯者。尾句不
可重云著冠之辭哉。はれりほれり。きみの毛。俗人の度石すあひ。毛と

ハて。毛て卒暮く度一ちまく。も。若冠ハ弱冠のとよちまく。女ノ弱冠と
よす。も。室也ハ若ノ著の髪毛りて。毛のまく髪毛。うぬとゆひて。う
キのあくまくまくち毛かふと。おももかと。う。髪と。ハ。毛のくまくと
キ。で。ちる。脉ハ拾穂を。設。ス。代。ス。モ。ト。即。ス。付。ス。髪。す。皮。す。付。ス。髪。す。

決曰

橋之光有長屋爾。吾率宿之。宇奈為放爾。髮舉都良武香
火。うと。本。文。よ。セ。モ。髪。く。う。も。お。ま。う。ホ。と。ハ。ま。え。手。毛。も。長。年。が。髪。く

長忌守意吉麻呂歌八首

刺名倍爾。湯和可世子等。櫟津乃。檜橋從來許武。狐爾安年
佐武

さーま。みゆりのせこと。い。ちひづ。の。ひ。ざ。よ。か。ん。き。つ。よ。あ。じ。さん

和名抄桃子。佐之奈用。佐云。狐木豆。と。あ。き。つ。い。の。く。も。う。櫟津ハ先恭紀。よ

到倭春日食于櫻井上、そへ檜檣ひのきのまどにて、從來二字より
よあるう、又ハ何文なんぶ、あじさんハ全俗ぜんぞくへたむよいつてやく、宴食うたげの
序じ�よりあるうと一つようちもへ

右一首傳云、一時衆集宴飲也。於時夜漏三更、所聞狐聲。
爾乃衆諸誘興、麻呂曰、聞此饌具雜器、狐聲河橋等物、但

作歌者即應聲作此歌也。

於の下時と吉本是子作、但箇の誤り下二行

詠行騰蔓菁食薦屋櫻歌

食薦敷蔓菁煮将来櫻爾行騰懸而息此公

ちごうときあとも不りてきうつぞにむうべきかけてやそのこのきさこ

和名抄厨膳具庖丁、食單食卓も、食と併ともふるふよく薦すくすく、又行騰無加波岐

行騰也、字燒勝年加波支とも、時官奉持みけい化

詠荷葉歌

蓮葉者如是許曾有物意吉麻呂之家在物者宇毛乃葉爾
有之

はぢばかくこそあれ、をきまろびいへなるすの、はうものはかあら

あれハ、あれモハ、ほほく、もく、和名抄芋以用都葉似荷其根可食とく、

いもをくらむとソリラ、ス宇ハ伊の語の

詠雙六頭歌

和名抄雙六子一名六菜

俗云頭久

頭子佐双六乃

こゝハ頭の

字の下子を股ふくせらう

一二之目耳不有、五六三四佐倍有、雙六乃佐歟

ひとふこのめのの小あらばりつむつみつよつアヤとすぐるくのせ、
只頭子の數のの一より六までの名をよするののそ、さいだら大苦マダラ、立タ六ロウ

詠香塔廁屎射奴歌

香滻流塔爾莫依川隅乃屎鮀喫有痛女奴

うめれるたよみあよやそ、かくまのくそ、おもれめる。いきめやつこ
式忌祠^{ヨリタキト}堂称香焼^{ヨリタキト}と見え、紀主燒香をこととたくと訓、佛かす香
を壁^{ヨリタキト}よぬるすと見え、智者妙釈名云廁^{加波}_{トヨ}、隅へ隈の誤^{クス}え隅と
くまと訓、て、川とひく廁の切とくめくとくと、劍ハ俗又小劍^{シケ}とく
カのう、とくそハ劍の唐の字^{シケ}、又劍の一種^ク、めやつこ^ハ紀婢^{シテ}と訓、て、き、
甚のこととく、劍の毛りとり、妻^{シテ}まぬかの傍^{ヨリ}の清淨^{シラヌ}として、やま
かさまの浪^{ヨリ}とく、津櫛^{シテ}をもつれ^{シテ}、ともれ^ハ、をもつつき^{シテ}と云
ふろこと、いづ

詠酢醬蒜鯷水葱歌

于疑字方荪上俗
下正

齧齧爾翁都伎合而鯉原吾爾勿所見水葱乃養物

本ラ今
ニ誤

玉掃、近來鎌麻呂、室乃樹與、棗木可吉將掃為
たまばゆきからくかまくろむろのまことあつめぐわく、かさだのむため
むじくさハレ、ナキヨリあく、和名抄地膚、一名地葵、和名尔波久佐、
一名末木久佐
あるまえ、主刑丸らうん生牛れ、みの羽とすよう、ぞせよ賜玉筆、ゆき記
すまく、もつまのをつみのくすのむづきとよしるハ、ひとて候る筆、みそ

今と、宴へきて川に座まつて、舟のうらやく、たゞかまとひじきと、やつ
こちよみゆきひあやへて、半十月、天木香とむろとよまく

詠白鷺啄木飛歌

池神力士儻可毋白鷺乃梓啄持而飛渡良武

大和十市即池上である、禊ハ傳字すては池上の、そこまでかる翁とせ
るをうか士ハよき力あるゆきとて、ちり力士の絆おもむねびとて身一
すきりすきり、浮きの巣化とて、本の小枝とくはつてあきとかのか士
傳よえきこまき十キモウムアガヨホリモキの枝くいおりてきを

忌部首詠數種物歌一首 各忘失也

朴棘原燒除曾氣倉將立屎遠麻禮櫛造刀自

戸木みつちと判和名村蛭美豆知龍属也とあり、仁徳紀六十七年吉備中國
守臣祖縣守少主入一丸と斬る事アリ。

作主未詳歌一首

成襄寸三二栗嗣延田葛乃後毛將相跡葵花咲

なちづめキミヨアハツキナシクビのむちもありんとあすひをちやく
春姫云梨のまのちもとぬみて、うれよう春々うきうきと春と春、うる
次子、栗と肩とよきよつて、二の匂ハ大よ運使とよきとよみとよみ、ちや
ハ枝とそく神よソシ、葵ハ達ヒメ掛ヒテナシモトトア、とば父モセ
モトナシ田島トモリハシ、キ由ト吉ハ後く

獻新田部親王歌一首

賛賀ノ賀
誤官本
ニ改

勝間田之池者我知蓮無然言君之鬚無如之

がまうみけまはるをちまうーまでのりきみのじけなき、ふことー

かつまこの池大和ニ、傍ニ堵裡ニ生遊して此池をくわうよく堵ハ
都とモハ用れ、奈良をモ不すまー、云のとハ傳モハづく水彩
清い蓮花也と婦人よ活まふと、婦人の蓮もとといふ、哉れかと多く
そとゆくモーとぞいて、さくみに緩きよきと、さくで脣をきらめー
つるこ賛とく半贊よ送れど、友をふちも改、和名村之毛豆賛ノ今頤下毛也と
モ、良多其道濟ぬまうりもとすがのかつまこの池も、ひめたゆふえ
きよ、わきよいひきようせば、つまこのものよと、ひうちアモ

右或有人聞之曰、新田部親王出遊于堵裡、御見勝間田
之池、感緒御心之中、還自彼池、不忍憐愛。於時語婦人曰、
今日遊行見勝間田池、水影壽壽、蓮花灼灼、可憐断腸、不
可得言。爾乃婦人作此戯歌、專輒吟詠也。毛詩桃之夭夭、灼

其美也曰灼、美盛也とあり、可憐官牛何怜よ化、諸神中お諾よ化專輒吟詠也

謗佞人歌一首

奈良山乃兒半柏之。兩面雨。左毛右毛。佞人之友。
たまやまの、みてがーの、そおれにかふしかくふし。ねぢけびとのども
をせちをのせよみてがーのほまれどしよみて。柏の葉の足のまよひされば
は風うど。片バ葉の裏表つも。トろくえれべ。二面とぞと厚く。能用高枕
みがへとみて。ハトリ。ひらでともよき。扁う。キサト延防人。うる。布多
富我美阿志氣比等奈里阿多由麻比ガ。よもとまよさきわと小さすと
よも。すういうみハ。兩面神。あけひとハ別佞人。と。之。久バ。いと。兩面と
すうい小とよく。佞人之友とあけひとのこもと。河んと。それき。宮モハ
えび。あだと。河り。うし。案へ。そねぢけと。よもハ。くわの曲れと。ねぢ
れ。も。うし。ねぢけびと。河うし。ほほの人の河うし。こそねハ。誓古
訓。ふれで。一车爾のまよひて。す。おきてと。河り。

右歌一首博士消奈行文大夫作之

傳化書考五年と明経

第二博士正七位上背奈公行文とし。と。か。う。え。ゆ。消。セ。や。の。る。ま。じ。く。を。

く。く。ハ。背。の。ほ。れ。ま。く。く。公。の。が。お。と。股。せ。き。

久堅之。兩毛落奴可。蓮荷爾。渟在水乃玉。爾似將有見
ひさかの。あめ。も。く。め。う。も。す。ば。た。ま。れ。る。み。づ。の。た。ま。ふ。に。く。る。く。ん
く。ぬ。う。ハ。す。れ。く。く。将。有。ハ。ト。と。ほ。ほ。う。

右歌一首傳云。有右兵衛。姓氏未詳多能歌作之藝也。于時府
家備設酒食。饗宴府官人等。於是饌食盛之。皆用荷葉。諸
人酒酣。謁舞絡繹。乃謗兵衛云。關其荷葉而作此歌者。登
時應聲作斯歌也。洛澤曰。東京賦呂向注。相連不絕貞。と。ゆ。

無心所著歌二首

吾妹兒之額爾生流。雙六乃牛之。倉上之瘡

吾兄子之讀鼻爾為濟者夫禮石之吉野乃山爾永東曾懸
有

家官本我ニ作ムトヨシ
佐家禮流

たゞさき、牛若抄史訓云。唐韻云。松毛漢語抄云。
松子毛乃之木乃太不彷伎アシテ、たゞさきハ股塞アシタマの墨アシタマ也。子有不六
紀アシノ因アシと云ふらと云ふく、あろき石とソノヘ、冰奥アシタマ和名抄劍アシタマ小今按俗
云水奥也。

右歌者舍人親王令侍座曰或有作無所由之歌人者賜

以錢帛于時大舍人安倍朝臣子祖父乃作斯歌獻上登
時以所募物錢二千文給之也 天武紀朱鳥元年春正月大極殿
御ノテ宴を請王卿ニ賜是日詔曰朕王卿ニ無端事をなせん仍對
言實と渭ハ必賜カ有ヒシテアラ子裡文”傳紀子巨勢朝臣子祖父

嗤チ々チ

以錢帛于時大舍人安倍朝臣子祖父乃作斯歌獻上登
時以所募物錢二千文給之也 天武紀朱鳥元年春正月太極殿
御前宴請王卿等賜是日詔曰朕王卿等無端事焉仍對
言實と渭必賜も有くまよひよ。子稚文”傳紀云巨勢朝臣子祖父
トリアム名ノ同トテ美人也

池田朝臣嗤アトミシコト大神朝臣奥守歌一首 池田朝臣アトミシコト
名忘失也

寺寺之女餓鬼申久大神乃男餓鬼被給而其子將播
トモシのあがきまとそくおほみわのとかきたからてそのこうまく

田朝臣嗤アキナリ大神ミツカ朝臣奥守歌一首 池田朝臣オキマリ
名志失也

池田忠失朝臣也

うまとんと川(き)

大神朝臣奥守報嗤歌一首 伎紀宝字八年正月正六位下より
從五位下を授け又被

佛造真朱不足者水淳池田乃阿曾我鼻上手穿禮
ほとけくるまそほたらすみづこまるいけるのあそづらものとやれ
條里(じり)ひ立てぬきてまよ真朱(まはに)と河(か)と送(おくり)給(たまふ)
星(ほし)と司(つかさ)るかくいづ、少(すくな)まなハ池(いけ)とほん施(し)因(いん)
殊豆(ミヅタ)摩蘆(マラ)よきのいける、あきハ吾(わ)えへ朝臣(あそ)くきをもと
及(およ)まとせ(よ)く池田翁(いけだのう)の年(とし)とされば勢(ぜい)よきういす、源氏(げんじ)
詮(こと)まつも充(ゆう)、あれが(う)とくゆう(よ)ハ山(さん)もも(もも)いきづきも(も)ほどことの
ゆ(ゆ)う(う)あり、又(また)あうをもとがきつて(て)あ(あ)も(も)とま(ま)すと
あ(あ)も(も)とま(ま)すと

或云 出下字の行(ゆき)く
平群朝臣嗤歌一首
小兒等草者勿剪(まは)ハ穗蓑(スヌイ)辛(ハリ)穂積(スヌイ)乃(ハシ)阿曾我(アソガ)腋(アキ)草辛(ハリ)可(ハシ)禮
わら、どもくさみ(カクサミ)やほ(ヤホ)て(ト)ほ(ホ)づみのあそ(アソ)う(ウ)やき(ヤキ)く(ク)モ(モ)ト(ト)
やほ(ヤホ)と(ト)花(ハ)詞(シ)腋(アキ)草(スヌイ)モ(モ)ト(ト)
穂積朝臣和歌一首

何所曾(アソ)真朱(マツナ)穿(スル)岳(イ)薦(スル)平(ヒラ)羣(ムツ)乃(ハシ)阿曾我(アソガ)鼻(アソガ)上(アキ)手(アキ)穿(スル)禮
いつくこそ(まは)ちほ(ホ)るを(の)こ(も)だ(み)べぐとのあそ(アソ)う(ウ)も(モ)の(モ)を(モ)やれ
生(アソ)り無(アソ)ひ(アソ)ふ(アソ)と(ト)そ(モ)だ(モ)花(ハ)は(ハ)う(モ)羣(ムツ)氏(ヒ)ア鼻(アソガ)お
き(モ)と(モ)あ(モ)さ(モ)る(モ)

嗤(チ)咲(マツ)黑色(スル)歌(ガ)一首

鳥王(トリノミコト)之(ノ)斐太(タ)乃(ハシ)大(タ)黒(タ)每(タ)見(タ)巨(タ)勢(タ)乃(ハシ)小(タ)黒(タ)之(ノ)所(タ)念(タ)可(ハシ)聞(タ)

ぬまひたのむやくろみどにこせのをぐるや。まちゆるかも
たの侍とるよ大黒ハ斐を教玉とさへ、小黒ハミタヒととせり、ぬ
みの枕河、太ま小黒ハ馬をりあはべー、一るハ馬きをすとをもとへんよ
ははよきる少セモふうて、かくハいつまうん、まく玉房斐を教侍と
そくと、あくちふゑをもがゆよ、斐を教侍もぐれて思ひやうえ、
水をがおぎりうてトモモ

答歌一首

造駒土師乃志婢麻呂白爾有者諾欲將有其黑色乎
くまくらはのとじまろ。さうなれば、一ほーのくく。そのくといふと
神代紀天穗日命此云出雲臣武藏國造土師連等遠祖也。垂仁紀三十二年
生雲國の土御一百人とめりて埴を取て人馬種しのぬの舟を造り、以
てアリゆされハ船と造る。是の因、とくとく、小通がきのサーカ

小通がき

石歌者傳云有大舍人土師宿禰水道字曰志婢麻呂也。於
時大舍人巨勢朝臣豐人字曰正月麻呂與巨勢斐太朝
臣名字志之也島
大夫之男也兩人並此彼貌黑色焉。於是土師宿禰
水道作斯歌嘆嗟者而巨勢朝臣豐人聞之即作和歌酬

嗟也。後紀養老三年五月巨勢斐太臣大男等二朝臣姓と號とも。這の高大

夫ハ官卒島村大夫トシキトヨシ。後紀天平十六年四月三日左京亮外侯五位下

巨勢朝臣島村と平城宮留守と爲とらゆ

戯喧僧歌一首

法師等之鬚乃剃杖馬繫痛勿引曾僧半甘

ほうへらのひげのそりぐひまつときくもじきそ。ほうへあらかん
そハラク後と引ゆき、口唇のじくま十指もとくも、引杖と引ゆき

嘆歌二首

志下
一失一行
鷗今鳥

の後又へと生れると、本のやうにスサノウとまづくらひます。
孝徳紀古人大兄命即位と據て、傳とあつてあります。伝與まし詔をうけ、
佛教と塔の同様に鬱髪と剔除で、袈裟と被着こよふ。かく人ゆる。さうの
うちハ半分のとおり、なうもあらんて既りて、貧の漢へ

法師報歌一首

檀越也然勿言氏戸等我課役徵者汝毛半甘

たんをちやとうもとひしてこらう。うえたちもくらばられむわすのうかん
安沖主檀越ハ旧譯の梵語、新譯ハ檀那。此又ハ布施もろとひて、おひ
めべーといされき。室もハ氏戸ハ戸長の誤り、アサキモミベー。えふも
スアラ、おほやけナリ石財と役はせいかきどもする。おうりかん
ハちよいふめー

夢裡作歌一首

荒城田乃子師田乃稻手倉爾舉藏而阿奈子稻子稻志吾
戀良久者

あさきだのうだの、ねとくとつみて、ああうぐー、わづらく、ハ
あさき四ハ新望をう、す田ハ麻のて田もくじ、うぐー、おのびりこう
まできわるるも、うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
まく、松と糸万束と枝まねたくと、神昌のうとくとくとくとく
ひねぐーとよじづ、おの勢もとくとくとくとくとくとくとくとく
格のえーとゆで、軽くみよでとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

右歌一首忌部首黒麻呂夢裡作此戀歌贈友覺而令誦

習如前

今レ不ふほ官もよより改、舊とハ別此うの事とア

獻世間無常歌一首

生死之ニ海宇獻見潮干乃山乎之努比鶴鴨

いきまはのさつのうみをいとえり。さやひのやまと。生ぬじつものも
妻けミ。嘉嚴經云。何能度生死海入佛智海。三。潮干の心とリ。彼岸
こよのひもと生死の海のかきこゑす。それとまよひを爲の
樂果とながつこと。いづ

世間之繁借廬爾。住て而將至國之多附不知聞

よのなみのときかしわゆ。ともみて。いそらんくふのたづきよさらども
まもる鷺ハ傳字。うて醒へ古事記穢繁國ハきよもきよもと訓へ。十三
十三小屋の四忌屋。鬼の四忌手。うちの土主と小団ド。きくとも破ヒリ。仏
法うて此世と釋ヒ。うて。がたりとハ此世とかのせと。うてよき。

右歌二首河原寺之佛堂埋在倭琴面也。河原寺ハ荒野川原
寺もても左左のあきりと。天武紀三年三月孝生と張。始て一切經と
川原寺ニ寄りて。ゆ傳とて。を倭の邊也と之。傳れ

心辛之無何有乃鄉爾。置而有者蘋孤朕能山乎。見未久知
香谿務

ころと。むろのことに。おきたら。ちこやのやまとみまくちつけん
無何有御蘋姑射山ハ若す。欠ゆ。をある。處す。と。より。こもうぞー
のー。ハ。妙。珍。こちも。う。ハ。目。よ。を。く。ア。ん。し。こ

右歌一首。こふ化考と附せら。うまう多くう處の。こまく。う處は。
鯨魚取海哉死為流。山哉死為流。死許曾。海者潮干而。山者枯
為禮

いきなどあうみやちにそよ。やまやまふらも。まねこそ。うみへまかして。
やまへかれそれ

枝ひきしま十三そよくぬくま。ひのまんかくもうつきあ。のよにとすてて。
うめへあ。あそくうせみのよんじよもとばく。まくともふもあ。を
孝とのれえとよす。おもとそばくとめりて

右歌一首

嗤喫瘦人歌二首

石麻呂爾。五口物申。夏瘦爾。吉跡云物曾。武奈伎取食
い。まうふ。これりのまよを。あつやせよ。よ。とすのぞ。じまきとあめで
賣世反也。

利名抄贊無奈 とうまきと

瘦。母。生。有。者。將。在。乎。波。多。也。波。多。武。奈。伎。宇。漢。取。跡。河。爾

流句

やすくもひきばあくんとほこやは。じまきとどるしかたれ。かうす
夜。ちがく。生。て。あ。き。と。鐘。と。と。と。わ。ゆ。ゆ。く。と。よ。う。れ。く。と。川
や。せ。く。わ。と。そ。ハ。伝。く。

右有吉田連老字曰石麻呂所謂仁教之子也。其老為人
身體甚瘦。雖多喫飲。形似飢餓。因此大佯宿禰家持聊作
斯歌以為戲。唉也。
後紀宝龜九年二月内薦佐外從丑位下吉田連古歷
無豐前守。ト。有。も。か。く。ト。又。ゆ。此古ハ石の。後。う。と。と。没。じ。享。と。化。ば
ス。地。ト。あ。人。な。く。人。は。も。う。仁。教。ハ。石。麻。呂。の。父。の。名。も。く。ト。吉。田。連。ハ。後。紀。寶
九。後。後。紀。等。六。文。徒。々。源。す。ニ。あ。ま。く。か。と。濟。圓。よ。う。ぎ。れ。ば。字。う。の
タ。ま。く。一。い。て。姓。氏。通。よ。ハ。任。那。國。ト。う。等。ト。え。ゆ。飲。ハ。飯。の。達。ち。し。

高宮王詠數種物歌二首

瘦ヲ瘦
ニ誤

嗤ヲ嗤
ニ誤

葛英爾延於保登禮流屎葛絕事無官將為

くすふよちひぢりされくそかづくたゆくとあくみやづくさん
おりぐれハ遠じうかくとく、海のねはるかみのそよのふがまらざれ
くるやうよきけくまくそれくし、和名抄細子草久曾加豆良とく、官、
官のほん、妻仲和名抄葛英ハ浮きく葛英う、和名抄葛英造夾ニ音、和名加波良布知此俗云地絆、
西海子とく本あると、葛敷に入られ、ハいのまよつかりとい、いつときあふれ
葛あよちひぢりされくし、ハ極きくす

臉ヲ臉ニ誤

婆羅門乃作有流小田卒喫鳥臉腫而幡幢爾居

ばらさんにつくれをふき、むからすますすこすて、そくやくふとて
妻和名抄婆羅門ハ梵天の後は、津引とくとく、廣學を智くして、
國家の宰臣和名抄漢七の士、キリの武士や、さんりゆうり、今
えーとくもしかる、もかとそくすこ、鳥ハまくまくまくまくのれ

戀夫君歌一首

飯喫騰味母不在雖行往安久毛不有赤根佐須君
ひきくどうまくしあくすあるけれど、やまくもあるすあくす
之情志忘可禡津藻
うごろしまれうねつ

七句のもく、六帖、ヨシモトヒツリとあるく、あよそもハアラリとあるく
日本に到り

右歌一首傳云佐ササ為王有近習婢也。于時宿直不遑夫君

難遇感情馳結係憲實深於是當宿之夜夢裡相見覺悟
探抱曾無觸手爾乃哽咽歎歎高聲吟詠此歌因王聞之
哀慟永免侍宿也

佐多ヨハ滋ミテノ事

比來之吾憲力記集功爾申者五位乃冠

このころのやうにしちらしもーあつめくう小さきさばごゐのがふり
立まつてまづとちうといひ、くくへ功劳こぼとがくすくよはまくほく
頃者之吾憲力不給者京地爾出而將訴

このころのやうにしちらしもーあつめくう小さきさばごゐのがふり
恋かの砌と底をひく、京兆ハ京城のうゝ名京兆アちくと略てちうり

和名抄京職美佐止豆加佐トモガ、ともちつよヒドキ

右歌二首

筑前國志賀白水郎歌十首

浦入直義が浦より流れてきて

よぞるよぢよよそ

王之不遣爾情進爾行之荒雄良奧爾袖振
おほきみのつゝさあくよさみづらにゆきーあうとらおきよそでよ
キ三あみくく腰ワタリもととと、そひよこゝよく腰取津カスラ
コトニシテ身半て、ひよゆゆゆゆとトナリ、神子すハちへふる聲
ももやきされば、あうとが胸すとよとゆい

荒雄良乎將來可不來可等飯盛而門爾出立雖待不來座
あらをらをこんのつゞかとひひかてかゞふそても、あてどきよそ
あうとが妻よのゆよなうてトナリ

志賀乃山痛勿伐荒雄良我余須可乃山跡見管將偲
きのやまづくもきゆそ、あらをらのよすうのやまとみつとぬび
半とよくねよハあり、わざりこづ、アヨーントヨモゲイ

おまよ、葛城と叶あひゆめりうれ、かくよみ

荒雄良我、去爾之日後、志賀乃安麻乃、大浦田沼者、不樂有哉

あらをらうゆきよしより、さうのあまの、おなぐらうぬ、さがーのる、かし
大浦田沼ハ、海きの太浦と、その田きの沼と、さがー、達磨引て
ゆうねば、あすう、業々、田代水まつするもかなねば、室も主も
はよおう、海士の名えき、不それば、ああおち浦と、よーじて
官許曾、指豆毛遣宋、情出爾、行之荒雄良、波爾袖振

つ、のそこそ、そーてもやらめ、そこへらうよ、ゆきーあらをら、なみよまで、よ

とのまくの、のう、用、と、

荒雄良者、妻子之産業、辛婆、不念呂、年之八歲、辛婆、騰來不座

あらをら、めこのちうと、おは、ぞろ、と、のやうせと、きて、きまくす
ろハ、脚輝之、俗多、半千五人、のうた、さうと、まくと、くえよ、まくすて
御、うよさんと、うよ、産業、と、うと、門、下、まくえの、あらう、
うやー、なむく、いづ、うりと、有利家と、まくと、あらう、

奥鳥、鴨云船之、還來者也、良乃、堺守、早告許曾

おきつ、どう、かと、うよの、ううこ、やうの、ときわう、ちやくつ、げこ、
むきつ、う、格、内、が、ハ、母の、名、あく、し、ち、へ、舟、ス、う、う、
に、ほ、れ、扶、望、と、名、舟、う、舟、と、吹、き、こ、と、が、か、一、ゆく、ほ、と、母の、名、
せ、る、や、よ、一、ち、す、記、多、之、石、楠、船、神、と、よ、も、少、す、の、ほ、す、さ、よ、に、よ、
そ、く、に、ア、書、紀、ア、天、船、舟、と、り、す、と、く、也、良、後、坐、よ、そ、に、あ、ふ、べ、
オ、ト、ヌ、舟、う、立、と、無、来、ア、長、良、と、よ、く、と、ひ、づ、な、く、べ、一、こ、そ、ハ、外、す、

奥鳥、鴨云舟者也、良乃、堺、多、未、互、榜、来、跡、所、聞、禮、許、奴、可、聞

おきつどりかおとよあねやうのさきたとこぎくとさうをぬる
たてハ廻と、まれもとハねれとねじも、とまれとつま

らもとつまく、れとるがまきびきこゑるもととくいすへ

奥去哉赤羅小舡爾。裹遣者若人見而解披見鴨

おきしゆ。あらわよつてやうへおれひとく。ひらきしんかも

あうとおは事三半千ニよあひりよ、又ナラヨモウタのとお

あうとおは事三半千ニよあひりよ、又ナラヨモウタのとお

あうとおは事三半千ニよあひりよ、又ナラヨモウタのとお

大船爾。小舟引副可豆久登毛志賀乃荒雄爾。潛將相八方

おりねふとおひきうづくと。おのあらとひづきあらめや

モ若抄サカシ船ボウ小舟也とく人多出アツヒテるよふそ、お舟とお

船ボウとく人多出アツヒテるよふそ、神功紀カムコキあまの

右以神龜年中太宰府差筑前國宗像郡之百姓宗形部
津麻呂充對馬送糧舶施師也于時津麻呂詣於糟屋郡
志賀村白水郎荒雄之許語曰僕有小事若疑不許歟荒
雄答曰走ハ城老ノの孫ヲ申トリ内ヘ文送スル雖異郡同船日
久志篤兄弟在於殉死豈復辭哉津麻呂曰府官差僕充
對馬送糧舶施師容齒衰老不堪海路故來祇候顧垂相
贊矣於是荒雄許諾遂從彼事自肥前國松浦縣美彌良
久墳發舶直射對馬渡海登時忽天暗冥暴風交雨竟無
順風沉沒海中焉因斯妻子等不勝特慕裁作此詩或云
筑前國守山上憶良臣悲感妻子之傷述志而作此歌

馬島以充島司及防人等糧とも、拖和名抄施中畧正船木也。楊氏漢語抄云、舵
船尾也、或作舵、和語多伊之。今案舟人呼挾抄為舵師是とも、志賀神名
帳糟漢郡志加海神社、和名抄糟屋郡志珂とある。ト牛澤屋とも、ハ居え
官牛糟屋とも云ふ。和名抄のレホ志阿ミミヒ志珂の誤、矣。仲云別
昭神才おみ後新教民のうふ、み、らくのびひみかのぬあうてりと
載、能因坤元議よりあ國ちの源は源よアラとの事とソシテ、又後紀
第六松浦郡曼樂境と云、そらと云、美称良久とす由ヨリハ美称良久
の邊とせり、續紀室龜三年十二月太宰府言、壹破島様後六位上上村主墨
繩等送年糧於對馬島俄遭逆風、船破人沒、死載之穀隨後漂失、謹檢天平
宝字四年格漂失之物以部清、自今以後評定虛實微免許之

紫乃粉涵乃海爾潛鳥珠潛出者五口玉爾將爲

むらさきのこがこのうみよかつてくとくたまづきでばわぶたまにせん

角島之迫門乃稚海藻者人之共荒有之可杼五口共者和海藻

つぬトまのセモノヤウハヒトノナ、あらかナードヤガルハニキメ
角島式ニ長門国角島牛牧、和名抄海藻尔本共ハマノゾク共ニの
キニ稚めハ女よたよ、妻仲ミガムヒヨウモモサナリテ、ノ共共
トナリ、ヒトハ角島のセモノヨリト、人ガ刈んとされバ、ヨリタリツ名モ
ちノビセモノヤウあれ、アヌー、ドモ、キカタナリヨマモノヤヌアテ、
ヤシク刈ヒツメテ、ノリヒトヨハ、ナリケンユウレゼ、彼ヨハ、アビキニ
ミヅシトヤツムズヒトアシ、モレドヒツのムクヒト云ニモアヒアヒト迫ヘ、

たゞも候るあらうの地とよまるなるべ

右歌一首

吾門之榎實毛利喫百千鳥。千鳥者雖來君曾不來座
さうかどんのえのミカサム。カリタヅカ。ちとすハ。くれど。きみをきまきぬ
キナムハ。モテの西をもれど、まうあてつに。をじと。ある人から
トカハ百つもといで、うくふどサハ。とまね、とまとひて、カチハ。まのやく
あるるを。おと、さて多くのをとひ、先せなつて。うきうみがこのお
きつまよをハ。とく。けともハ。とく。せぬと。つまゆ。

吾明爾。千鳥數鳴起余起余。我一夜妻人爾所知名

わづかど。小ちど。わづか。さく。おきよ。おきよ。わづか。よづよ。いと。小ちど。ゆ
ま十。うめても。も。も。う。は。ゆ。の。も。づ。も。れ。い。ま。く。あ。り。あ。く。小
さ。ど。ひ。て。お。の。く。く。の。を。の。す。と。よ。お。お。お。お。お。お。

となきぬおまよおきよ。よつまんしことられといひ。が。と。ほ。れ。
せ。一。お。ま。ハ。遊。女。と。い。て。こ。ハ。ま。す。あ。く。は。始。て。一。米。き。と。よ。あ。く。一

右歌二首

所耽鹿乎認河邊之和草。身若可倍爾。佐宿之兒等波母
い。ゆ。す。を。ま。く。か。ち。ぐ。の。わ。う。く。そ。の。み。わ。の。き。す。へ。小。き。ね。へ。く。ら。は。し
奇明紀活。う。伊。喻。之。い。宇。都。那。遇。何。播。杯。能。倭。柯。矩。婆。能。ウ。く。あ。キ
と。ち。づ。も。ハ。き。く。か。ち。ぐ。の。わ。う。く。そ。の。み。わ。の。き。す。へ。小。き。ね。へ。く。ら。は。し
ね。い。そ。く。あ。れ。バ。わ。う。く。そ。の。ト。う。じ。一。身。ア。ミ。カ。ジ。の。ヘ。ア。の。男。ま。ぎ。、
魔。の。沿。と。も。行。ぶ。それ。と。沿。と。つ。く。と。い。て。和。ハ。草。と。く。ち。く。、つ。き。と。す
く。く。る。く。一。お。く。て。ソ。お。お。り。と。き。て。ほ。じ。し。お。そ。と。お。の。役。へ。お。そ。う
そ。の。役。へ。お。と。あ。う。て。お。の。あ。き。う。い。ふ。く。そ。と。う。古。多。紀。雄。界。原。ひ。く。
お。ひ。け。た。の。つ。く。る。ま。づ。、和。加。久。用。尔。ミ。ト。ま。と。い。ア

右歌一首

琴酒辛押垂小野後出流水奴流久波不出寒水之心毛
そとやけをれしたれをぬゆづみづめらくひですさじきいぢみづのうるも
計夜雨所念音之才寸道雨相奴鴨才寸四
けやおもほゆるおとのまくもきみちにあらぬうむらくなきよ
道爾相佐婆伊呂雅世流菅笠小笠吾宇奈雅流珠乃
みちよあいとハいろけせらもとつかさをかくわうをばるたまの
七條取替毛将申物乎才寸道爾相奴鴨

なつをとうかもあをさんものをすくなきみちふあぬうも
琴酒と麥中三琴うと柳へはとばたき小うう押されとスタムフ
ひてうう、琴うハ多の家の往くうまむととくうう
たましりの被後押垂か群いてもきうち東漁者によ押垂基時

トリ人あればううせ名ううあはれき、宣もと小ハ水の長、ちる
みぬゆもと、押まくハ序まく、無水をのせむ所念とすとハ言くいを
るの序、たゞみきののまつとあらうて、とまとまけばくもけやよ
ゆううくげやばいときとくさむりとく、さくえのサキ、とく、人目のサキ
よく、とと高とく、人のそれ、又人よほりとくとくとくとく
あるうととえりして、とてモモと次のくまくとく、ゆくハ神代紀
下瀬是太弱の弱とぬりとけり、寒水たとひやべとあれど承らうを
ちみ、と例へ、又景行紀寒水とそびきみわいとけ、そいそくもみそく
もそくとあれば、さむきこかくとくとく、あらぬとハアクと承らう
ハ毛の湯うそ、いわけせるれけるハ差くの古彦、妹うそくのまくされど雅ハ
けの湯うそ用うものとおがゆれば、うあんが考へ、うまくハ神代

紀ノ其頭所嬰五百箇御統之瓊、といつ、七條のセハ數多きを。又同將中
物半サすとハよま事のサす事もあれ、とももサすとつて、即ちのサキ
トヘハ人目をき道みてあへり、妙の事ある事と、まうちも殊と云取
りて、がまとせんゆと、こどりと古きもの也。

右歌一首

豊前國白水郎歌一首

豊國企玖乃池奈流菱之宇禮宇採跡也妹之御袖所沾計
武

ヒヨクのきくのいけあるひーのうれをつむしやいひとみすでぬれん
此白小島ハ男のあん、豊前企玖郡あり、集申きくの寅とある曰正
寺せきのるうもとお池のりともわのそり神めくよるうとくよる
師付ふくまのをえたちの神をり

豊後國白水郎歌一首

紅爾染而之衣、雨零而爾保比波雖為移波尔也毛
くれもあよそめてしこる、あめすて、ふわひはすとしうつろぞめやも
化一へきまとつて、津事のあほす、移ももる毛ハ毛ももん毛れどうつ
ろひぐさへくもくもくハもくもくもく

能登國歌三首

階楯熊來乃夜良爾、新羅斧墮入和之、河毛但河毛但勿鳴
為曾禰浮出流夜登、將見和之
ははごとのくまきのやらよきをの、おとーれや、かけて、かなくて、
ちううそねうきいづるやと、みんやー

ちがその袖羽、くまきハ和名村能登郡熊來岐^{スカニ}とく、やらハと佐下佐の
さん沼津もとの芦荷生る様の石とやらといつ、きまきとのハ、鉢吸込

百濟王斧三百口と號す。其の後、此を化れ
る形にて化れると、主に奇牙を以て、りら
く、翁うわ一ハ吾えの黒の
といまき、室もハわ一ハと謂へよきくて、りの御く、といづもどよ此教の二
軒より、ソラ、キソモジト、かげシテ、ミハ、かまつて、ち教テリ。之は、
ゆく、主あるまことよするはあつて、人、事人の聲よ、こちくん、領ニ海底
いつまなびつて、ごくくハほ人の事がへりす。

右歌一首傳云或有愚人斧墮海底而不解鐵沉無理浮
水聊作此歌口吟為喻也

增橋熊東酒屋爾真奴良留奴和之佐須比立率而來奈麻
之宇真奴良留奴和之
は（たてのくまき）と（やよまぬらもやつと）もすひてゆてきあま
）とまわらもやつと

ほを、さゞめは處へひろくもひくとてうふとおぐ下と云ふ。
まへね皮肉ノラル、めぐらへ所罵ノミテ、ゆき破ノブクてのらすとりよきもじとくに、傍
立ノシタてのうそとりよきもじとくにあらわすとてつて、やつてこ
り、ゆききききのとくとあるのむと、空もハバヤエヤとのまぢかの間へ、
調ノシタてゆきゆきのむとて、

右一首

所聞多爾乃机之島能小螺耳伊拾持東而
石以
か一まねのづくきのセアヨの土くどみとシヒヤシカモテイイーカモ
都追伎破夫利早川爾洗濯辛鹽爾古胡登毛美高林爾
つきやすもちやカキ尔あらじきさきかきもすくと力みたうさきよ
盛机爾立而母爾奉都也目豆兒乃負父爾獻都也身女
えもうつをよみてはふまつうやめつそのまけちふまつうやみめ

兒乃負
づきのまけ

所聞多詔と古とそひたねとあれど、西國多三字が一まーの事と、がまと御ーし、和名抄解登国解登郡加島加えトクア、そこはもとて称とすまーし、れのをいきこよみて、ちくにハ和名抄細理之美、神武紀清きよいもひかといひ之多儀源能タマヒラシノミコト、へうきとごとく爲る所も見、いは後語みて、拾持本へ破夫利ハサウリとすハ新撰万葉よりややもと思黨保陽苗カヨミナミ、ちう數も、又はすとと御ー、すととと破るをく、こうとカミハ、ほり御傳ミツテあむにそりとつと同、く、嘗て言とく、高坏ハ數衆難要タクシ、士高坏タカヒラをもゆて、高坏タカヒラ御久タカヒラ案属也、史記云持案進食タシ、神代紀墨役饌モクヤクシタ百孔ヒヨウ、めづとハ愛子、まけハ没モク、身めづこの身ハ生モコト、まつやハ奉モツヤハりつて、妻メイけう負タマガシ二つタマガシノ刀自モコトよすまん、

和名抄負列女傳云古語老母為負タマガシ、和名度之タマグチ、妻メイは坂上郎女タマガシ、夫タマガシの大娘タマガシ、娘タマガシの妻メイ、わが子の妻メイ、とぞうるとおり、ばくちく女タマガシ、

名タマガシ、こゆタマガシのア、ドトタマガシとよもタマガシト被タマガシ。

越中國歌四首 納タマガシニモハ御タマガシ、及タマガシニモハ神タマガシ、改文武紀云
越後國伊夜比古神社タマガシ、とてと代タマガシて、た、越の國タマガシ、あタマガシハこそ阿タマガシ、
くタマガシハ次タマガシ越後國哥タマガシ、とタマガシ、鷹タマガシ狩タマガシ、あタマガシく、スモウと御タマガシの人タマガシえ
てタマガシ、とタマガシす、舎中タマガシのものの中タマガシ、アタマガシ、
夫タマガシよもタマガシ、大母タマガシのそタマガシ、夫タマガシよもタマガシをもれど、夫タマガシ通タマガシ、バ
夫タマガシよもタマガシ、依様タマガシて、道度タマガシ、とタマガシある。

瀧溪乃ニ上山爾鷺曾子產跡云指羽爾毛君之御為爾鷺

曾子生跡云

ちふたのすがやまふわーぞこむとふまーはふもきみがこし小
わーぞこむとふ

扶ひえ、後紀越中國射水郡ニ上神といゆ、そーは和名祿服玩具ニ
駢キル キル そー、或はミーはと洲り、幣の根まで生るあるべー、仁佐紀也
やまとくさみ箇利古武等とよきて應子產といふ

伊夜彦於能禮神佐備青雲乃田名引日良霖曾保零
いやひこのおのれかんさびあそぐものたきびくしさらこそめですす
神名姓越後國蒲原郡伊夜比古神社、後紀弥彦神社とてゆ、時
ときもむちむ必こまゆすあく日の下須と股せり、霖宮本霖ふれ
一云安奈爾可武佐備 あやもりす單くわと嘆詞へげくまた

日下須
脱

伊夜彦乃神乃布本今日良毛加鹿乃伏良武皮服著而角
附奈我良
いやひこのかみのふきとふくよらかのかのこやまくかをのきぬきて
つぬつまなうら

扶ひえ、山を登神とひはけ、ほらのらは地聲すて、今もうこく
鹿をかくよすされば謂くのひづく、麻ハ皮と角ハかくよすと人
のそまくいひすくよすと、鷹神紀天皇は淡路島よりして狩
みす、角見る麻皮と衣服とて生来生了すあれど、こよゆう、
かよ故りくよすむなうど

乞食者詠二首

伊刀古名兄乃君居居而 物爾伊行跡波 韓國乃虎

いとよのきみをやして、のふいゆくとへかくこのせら
云神宇。生取爾。八頭取持來。其皮宇。多多彌爾刺。八重
とよかみを。いけどどもよやつとありちき。そのかたを。たくみよさ。やへ
疊。平屋乃山爾。四月與。五月間爾。藥獵。仕流

だみへぐちのやまに。うづきと。やづきのほどふくも。うがすつ。うる
時爾。足引乃此片山爾。

二立。伊智比何本爾。梓弓。
ときふあ。ひきの。このか。やまに。うづき。ちひづれ。ふあづゑ。

ハ多婆佐彌比采加夫良。ハ多婆左彌。宍待跡。吾居時爾。佐
やつたを。さみ。じめ。ぶら。やつたぞ。こち。まつと。わづを。ると。ときふ。
男鹿乃。来立来嘆久。頑爾。吾可死。王爾。吾仕年。
を。の。きたち。あげ。く。ふ。の。よ。わ。坐。て。おほきみよ。れ。つ。ん。
吾角者。御笠乃波夜詩。吾耳者。御墨坤。吾目良波。真墨乃

立下來
行文

玄ノ室

わづぬ。みうそのちや。わづみ。みちみのつぼ。わづめ。うは。ますみの
鏡。吾爪者。御弓之弓波受。五尾毛等者。御筆波夜斯。吾皮者。
カミ。わづぬ。みゆみのゆそよ。うづき。うづての。ちや。わづか。か
御箱皮爾。吾穴者。御奈麻須波夜志。吾伎毛母。御奈麻須
みを。このか。なよ。わづ。う。ハ。み。ち。ま。す。う。や。わ。き。り。み。な。ま。す
波夜之。吾美義波。御鹽乃波夜之。耆矣奴。吾身一爾。
ちや。わづみ。き。ハ。み。ほ。の。ち。や。お。い。ち。す。ぬ。わづみ。じ。つ。ふ
七重花佐久。八重花生路。白賞尼。白賞尼。

なへを。あさく。やへを。あさく。まと。一。も。や。ね。ま。そ。一。も。や。さ。ね
伊刀古ハ古事記ハ。子孫神の。は。う。伊刀古。夜能。もの。み。と。う。ま。く。う。
し。ふ。洞。え。ほ。す。後。ま。と。の。く。う。ふ。ち。れ。と。ふ。せ。ハ。汝。見。く。と。う。て。ハ。居。く。う。
て。車。と。う。三。日。と。あ。い。や。と。ハ。ほ。う。か。の。ま。う。と。う。日。と。ハ。車。停。

と、そひのと、虎より神々、和名抄說文、虎良山獸之君也。もどりて、
けよ。すうじぞれんば神とひる。欽明紀より虎の子と汝威神とす。あり。
回紀六年十一月膳臣巴提便ハスピ、右脚より還て言ふと、巴提便忽ハスビ、左手と
のべて虎の舌を執、右手にて刺殺して皮を剥取す。又云ひて、上より
ナ重十匁ハキ、ハキ重ハキシモといふ。序へ、ハキ、うもハ松田、平野ひ、大和東群れ、某
精ハキ十七かきうも、わす擣ハシメつけ、またが張精ハシメうる時ハヌクニと云
る。回、夏精ハキシモとて、麻のこの角ハシメうる。推古紀十九年五月立日
兔田野ハサウエ、あひす、あれど、けあふすれ、ももす。乃らざるべし。
いちひハ櫟ハ、ハつたをさみハ、精ハのまきヒツカとひづく。ひめかづらハ、ひきハ鎧ハ
の里ハ、和名抄鳴竊ミハ、ハ目鎧夜豆女、加布良、又大神守式ミタマ、姫ハ、姫ハ、浦ハ、鞍ハ、革ハ、
姫ハ、トハ、小ハ、ゆれハ、比ハ、末ハ、すハ、小ハ、あるト、よハ、
翁ハの役ハ、空ハ、ももいめハ、通目鎧ミタマ、かハ、目櫓ハ、通ハ、ちハ、とハ、とハ、考ハ

「一、寺社と書店は、至る所にあつた。來の下の来ハ所文
ちもとト、麻の本ノ模、て地よりよきと云ひア、大オニムレハ仕アヒト、麻
の死ノ後シテ以テアケル用ヒラクチムト云、活之のモセ、此モヤの
詞ハモグリ今ノ穿のモセ、和名抄笠^{カハ}所以禦雨也、又簾^{カハ}保^{カハ}
簾の頂ヨ麻角をナシ、飾セモノス、一見みのつド、先ハ麻の厚ハ疊の
木謂之壺^{カハ}トモ、式ヨハカラツキトヨウナリ、又和名抄工匠具墨斗^{カハ}都保^{カハ}
瓦謂之壺^{カハ}トモ、式ヨハカラツキトヨウナリ、又和名抄瓦器類^{カハ}都保^{カハ}
ましくの傍、麻の間の竹^{カハ}のたるをハヤ、御^{カハ}らの弓をギ、そも麻
の爪をカラ彌小^{カハ}トヨ、御筆の毛ヤ、古人^{カハ}御筆の毛^{カハ}を、つる^{カハ}
鹿毛為柱、羊毛為被、毛^{カハ}の皮^{カハ}、毛^{カハ}の覆^{カハ}トシ、みちまうら、和名抄
鰯^{カハ}須^{カハ}、細切肉也、考^{カハ}失義^{カハ}、和名抄毛屋^{カハ}類^{カハ}詎^{カハ}尔雅集三獸^{カハ}吞
芻^{カハ}噬^{カハ}反出而嚼^{カハ}、云^{カハ}、麋鹿曰^{カハ}齧^{カハ}麋鹿尾^{カハ}為味氣是^{カハ}、^{カハ}カミミキミ

を後より余分とよう、度々大小便のうちもござ、度出の多くて吐出す
とりよべー、字鏡軒三とく、ことほのちやー、和名抄醯ミツル之保 因齋也
えい、乞と乞のいしよべー、おじきぬえ、老果ぬるのるを置く、
老をくへ候のえくふきおみて、せきへき花笑き幸みをも云
さまく、またくちやね、ちくらややれんりづ、ねハセと近ち、此
う一そ、麻のすのとひて、乞食のすなす、これハ乞食ハ身時シメ一れど
心安レ、用うずもあうすて候る今うそすと、席尔よせうよをもう、
スハ乞食のせうとくして、門へうちて物もしよと有べ

右歌一首為鹿述痛作之也

忍照ハ難波乃小江爾、盧作

難麻理豆居葦河爾宇

おーてもやなはのをもふ、ほつくか、あまりて、どうあーかふと、
王召跡、何為年爾、吾乎召良、木夜、明久、五告知

おほきみめまでと、いふせんよりとめむくらめや、あまくらく、わづか
事宇、歌人跡、和宇召良、木夜、笛吹跡、和宇召良、木夜、琴
こゝをうごびくわをめすらめやふえすきて、とめすらめや、こと
引跡、和宇召良、木夜、彼毛、令受年等、今日、今日、跡、飛鳥
ひきとりをめすらめ、かくくもくもくもうけんとけんとあとの
爾到雖立、置勿爾到、雖不策都久怒爾到、東
ふりてたぢれど、おきとすりつてのとくぬよ、うひぐの
中門由、參納來豆、命受例婆、馬爾已曾、布毛太志
なみのみをゆまゆまきて、みゆくうくわばうまふこうふまだ
可久物、牛爾已曾、鼻繩波久例、足引乃、此斤山乃、
かくのうふことをもはくれあ、びきのこのかくやさの
毛武爾禮宇、五百枝波伎垂天光夜日乃異爾干佐比豆留

夜辛碓爾春庭立 碓子爾春 忍光ハ

難波乃

やからうすよつきふもよたつてのううきてよつきおーてもやなにその
小江乃始岳辛辛久岳来豆陶人乃所作瓶辛 今日往
をえのちつれをからくられきてあもびとのづれるかめとをゆきて
あもとさかちきわめらふてぬりとまとー、やさも

おーてるや松何小にハ小琴の小よ四トク後後いつづく蟹が元りて
住と人のゆいひもとくかへす、難麻理とかまうとあるハ
ひづくへとへ室を没のゆく、なまうみくほすの古様、表一已津物
佐乃山辛とつも名はとりて名あると、ほくさう、此が風をもぐと川
るす集中多一、婆と麻の道よ通て例みて、あらしあまうも同下され

あまうてとよと涙で、かれ居るるへ、あーのふ、あーうあ野の、と、革
毛不よ假めばほりて、あせんよそ、何かよ縫と石うてあんと先云
く、ぬくとも、はざれのうんも琴川も行も用もてまるとりす、ぬく
うむねれととよあく、ちんハあくと人とよ、管のはくつは、声のす
と、ちんはくとよ、れあれ、琴川もよども、彼毛の下此毛の二す
脱もくとよ、くとよ、けくとよ、わせ、とけむくとよ、絶くと
へまある、れきよあく、あく、は、遠毛をま、先恭、近毛を八約を、
毛毛津原家天武、同源原家、持続文武、元治正宣和銅二年まで
種原家、まきく、れ、ば、さ、は、毛の化ちく、置勿、地名の、とく、
語まある、む、す、によ、奥山、岡、奥、の、三村をく、御、ある、七名
もあれど、まのうざきよ、が、銀不變ハ、木つねども、うそ、うそ、つて、

諸とまわてあやももと、都久怒じゆるもと、大和桃花もと、即ちもとら
ふむーは原ーと曰え、和名抄鞍馬具絆保太
綬也、をあくハ和名抄牛麿波奈
之 都良牛韁也、字書云秦牛乃波
奈岐牛鼻環也、
あくの教へをとれハうくもとよ、事二ほをくつこどと知りいをちくふ
とよあ足、足ひきうば序山、顯宗紀脚日本此傍山牡鹿之角えくと
き、やむふれ字錢撻毛年、和名抄及字院榆夜に
撻モニより榆モニ、内膳式榆皮一千枚、枚別長一尺
右榆皮年中雜御菜并羹羹等料えくもくちくゆるを拂ひ、ハいすへけ木
の皮と剥て日よ引いて、臼よつき粉すして食ひかのと、供御ゆく用ひ
らむと又えすり日の異傳字みく、日の氣へ、さしつるや
拂ひとも、からうしてよ春ハ、すりへ右榆よ解字を橘文て醯レシよセ、三代

蟹鹽也。ちと久ゆ、燾トト春ニほれア、モハ壁ニ挂ケテ、重シテ、ふく
よき冷トイナムトテ、陶人ハ余名抄陶者須恵毛乃豆久流、黏埴為器者也。陶
人うなづカメトヒリ引テ、燾トトも來ヒハシク鹽トセズトヨニシテ
がくいすむと、時裳モノの時ハ聞の怪ア、奏聞のとあり、またも
と仰人ト有ヘイもれき、室モハ時裳ノ二字と云トキサト仰ヘタれハ、
ちやめくじさトモヤキシトヨシトヒア、ねまう。

右歌一首為蟹述痛作之也
怕物歌 今怕ヨロシセモハ誤く、怕ハ字モヨ普鶯切恐也トモ
天雨有哉、神樂良能、小野爾、茅草翁、草翁婆可爾、鶴卒立毛
あめなるやさらのをぬよ、ちうやかすのやかり、はういこうづらをたつし
ま三天有さくらのとせとよすり、天よかくつるもとつし傳くてようする
うせりくどくとくとくせり、きみのとまゆまくら

きみうやあん、薔薇にまつて、春十日も、くわへて、ひたすら、おもろ
きみうやあん、薔薇にまつて、春十日も、くわへて、ひたすら、おもろ

奧國領君之染屋形黃漆乃屋形神之門渡

おきつてくよとてすきみうさめやう。きそめのやうがみのとわたら
たまちやくとあれど、ほく六ちのらむとべ。東海と奥つ國が、もくはみ
をゆる遠きを、關と外へとものとよ、そめやうは舟のやうとく和
名掛蓬庫有奈夜、舟上屋也、と、舟のとくもハ、あ、作へもすがくく
さうきあふて、度大の賀り財と、今くるぬあれば、あま財あれば、らとかえ
きよきあふと、うくと、うくと、うくと、うくと、うくと、うくと、うくと、
大日經ヨウジキぬれ金くと、御んともいづ、神の門が、まセ神々もつもあど
いす神、ひるはのまづく、門が、まづのまづの軒、ひらひらの歎も

「さあ渠のやうの舟をきて、今き近門を渡らんがよろしく」

人魂乃佐青有公之。但獨相有之雨夜葉非左思所念
ひとたまのとをうちもさみがたふひとりあへうあまよひさくくおやゆ
せなうは引人どまきよ、さとハまきよとり、さハ歎惜く、嘆惜修
まつむゑよ、モハ雪そづくもろきとふもいア、にきづれまれ
まくしゆくかくおきわーきやハソクのよーとゆくハ、ねざして
えくくぬももよもよや、思の下えと股もるの室もう入ふま
さきのれゆきとをもきくまあるといす、葉非左思ハ漢字ち
て」といつたる考べ

卷之二十一

周平王二年春正月，葬昭公于栗林。夏五月，葬昭公于栗林。

秋七月，葬昭公于栗林。九月，葬昭公于栗林。

冬十月，葬昭公于栗林。十二月，葬昭公于栗林。

葬昭公于栗林。葬昭公于栗林。葬昭公于栗林。

